



Title	La poétique visuelle de Michel Quillian, poète héritier de Ronsard : les divers aspects des expressions visuelles de La Dernière Semaine (1597)
Author(s)	林, 千宏
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58523
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について こちら をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【19】

氏 名	はやし ち ひろ 林 千 宏
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 4 2 8 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 23 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	La poétique visuelle de Michel Quillian, poète héritier de Ronsard : les divers aspects des expressions visuelles de <i>La Dernière Semaine</i> (1597) (ロンサールの継承者ミシェル・キリアンにおける視覚的詩学：『黙示週』(1597)における視覚表現の諸相)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 和田 章男 (副査) 教 授 上野 修 言語文化研究科教授 岩根 久 准教授 山上 浩嗣

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、16世紀末のフランス詩人ミシェル・キリアンを主な対象とし、彼の作品『黙示週』（*La Dernière Semaine*, 1597）に現れる視覚表現を考察・分析している。キリアンが視覚表現の技法の模範としたのは16世紀最大の詩人ロンサールであったため、ロンサールの視覚技法がキリアンにおいてどのように変化したか、さらにそれが16世紀末期から17世紀初頭の詩法とどのように呼応しているかを明らかにすることを目的としている。ロンサールを対象とする第一部と、キリアンを対象とする第二部から構成され、詳細な文献目録と合わせてA 4

判247頁から成り、執筆言語はフランス語である。日本語四百字詰原稿用紙に換算すると約750枚に相当する。

第一部ではロンサールの叙事詩的作品（未完ながらも純然たる建国叙事詩である『フランシアッド』、並びにオード、讃歌など、人物や事物の称揚が主題となる作品）における視覚表現が考察される。ロンサールは恋愛抒情詩人として知られるが、古典古代を崇敬する詩人として叙事詩のジャンルを重視していたことは言うまでもない。以降、叙事詩の流れは、デュ・バルタスの『聖週間』、ドービニエの『悲愴曲』、キリアンの『黙示週』へと引き継がれることになる。ロンサールは異教神話を使用しつつ、寓意表現によって視覚的豊穡さを発展させた。論者は、ロンサールのアレゴリー的技法をネオ・プラトニズムの影響による神秘主義的作風ととらえ、読み手の解釈を要求する詩法ととらえる。さらに古典古代の文献を渉猟しつつ、視覚表現が古代から継承されてきた記憶術と深く関係していることを検証する。ロンサールが図像を用いて詩的創作のテーマを歌うことに注目し、記憶の中で詩の創作と解釈が行なわれるという詩人の創作法を明らかにしている。

第二部はミシェル・キリアンの『黙示週』の分析にあてられており、本論文の中心部を成す。はじめにキリアンに関して入手可能な情報、および『黙示週』の3つの版のヴァリエーションの表を提示する。次に『黙示週』の第1日目から第7日目までを、それぞれのテーマ、特徴に合わせて考察を進めている。まずは最終日である「第7日目」をとり上げ、天国の神殿を視覚的に描写するエクフラス技法にロンサールの影響を確認するとともに、明証性への志向を明らかにする。戦争をテーマとする「第2日目」と疫病をテーマとする「第4日目」に関しては、異教神話に基づく図像表現を考察し、四大元素や医学用語など科学的用語の多用に着目し、言葉の多義性から一義性への移行を論じている。飢餓を主題とする「第3日目」では、言葉を列挙しながらも、対象物が存在しないことから言葉の機能が浮き彫りになる点にキリアンの特徴を見る。「第6日目」の「最後の審判」においては、描写対象に応じて多様に変化する文体に、新たな文体の模索を確認し、第5日目では反キリストが表象されつつ、「理性」がとりわけ重視されていることを明らかにする。最後に、作品の序となっている「第一日目」を扱い、古典的な夢という枠組みを使いながらも、理性的な方法によって天に近づく点が強調され、一週間という時間構造に組み込まれ相対化される詩人像を浮き彫りにする。ロンサールの神秘神学的詩法と比べて、理性、明証性を重んじるキリアンの詩法は、17世紀の古典主義詩法へと繋がるとともに、言葉の虚構性・恣意性の表現は後のバロック精神とも通ずると結論する。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、16世紀末の詩人ミシェル・キリアンを研究対象とした世界最初の博士論文であり、その点において既に意義がある。16世紀末は特に詩の領域において未開拓だった時期であり、近年デュ・バルタスやドービニエが注目されるようになった中、もう一人の重要な叙事詩人としてキリアンを再評価することにつながるという意味でも重要な業績と言えよう。16世紀最大の詩人であるロンサールのエクフラスを中心とする視覚的表現の特徴を明らかにした上で、ロンサールとの比較を常に意識しつつ、キリアンの視覚表現を分析したことも、詩人を相対化し、時代の中に位置づける上で有効な手法であると認められる。具体的には、

ネオ・プラトニズムの影響下にあるアレゴリーの神秘主義から科学主義へ、言葉の多義性から一義性へ、神的「熱狂」から明晰・理性重視へ、言葉の意味よりも言葉の機能へという詩法の変化が明快に論じられている。理性および明晰さを重視する17世紀古典主義時代の詩法は決して突然に現れたものではなく、ロンサールを中心とするルネサンス時代の視覚的詩法を継承しながらも、神秘性を脱却して明証性への志向を強めていくキリアンの詩的創造は、伝統を踏まえつつ時代に沿って叙事詩ジャンルを発展させてゆく創意に満ちたものであったことが説得力をもって論じられている。

キリアンについての先行研究は雑誌論文がわずかに5点のみであるが、古典古代の文献や同時代の文献の調査も行き届いており、また旧教と新教との複雑な対立関係などの歴史的状況も踏まえ、視野の広い論文となっている。論旨は常に明快で、フランス語の文章も極めて優れたものである。ただ、キリアンに焦点を当てながらも、ロンサール論とキリアン論とが量的にほぼ拮抗していること、『黙示週』を分析する順序に必ずしも必然性が感じられないことにやや構成上の問題があるが、研究対象の独自性、分析力の優秀さ、学界へのインパクト等、今後の研究の発展への期待度の高さも含めて、高い評価を与えることができる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。